

## ○紅花絵巻

卷子本 三五・五×七七五・〇

武田陽氏蔵（東根市）

紅花は、「最上紅花」の銘柄で全国的に有名な村山地方の名産であった。この紅花の最盛期における生産の実態を、もっとも具象的にいきいきと語ってくれる資料が紅花絵巻である。

紅花絵巻に落款はないが、東根六田の狩野派の画家青山永耕（一八一七～七九）が描いたという説がある。（紅花絵巻は、東根市神町の武田半十郎家十代当主・武田陽氏の所蔵であるが、六代半十郎の二男・孫太郎（一八三七～六六）が書いた「当世諸出入日記」及び「年中諸事向日記」には、青山（永耕）家との交流が記されている。）

紅花は、近世の東根全域で商品作物として栽培されていた。

紅花は、春の土用に種を蒔き、夏の土用に摘みとる。以下、紅花餅（はなもち）づくりの過程を、紅花絵巻とともに辿ってみよう。

① 花摘み とげがあるので、早朝、朝霧のあるうちに花卉を摘む。花筵（はなむしろ）の上に広げ、花卉以外の冠毛や雑物をより分けて捨て、花をほぐす。

② 花振り 紅花ををざるに入れ、井戸水やきれいな川でよく洗う。

③ 花もみ 半切桶（はんぎりおけ）というたらいに入れて、少し水を加えてさつと素足で踏みつけ、雑汁を出す。花卉は踏むほどにオレンジ色になる。

④ 水洗い 黄気汁（きけじる）という水溶性の黄色素を揉み出し、ざるに移して水で洗い流す。このように「荒振り」、「中振り」、「揚げ振り」と三回紅花踏みを行った。

なお、黄気汁を別の容器にとり、木綿をつけて染めたものを花染木綿（はなもめん）といい、産着や肌着などに用いた。

⑤ 花寝せ 花蒸籠（はなせいろう：縦一メートル、横一・三メートル、深さ七センチくらいの木枠で下部がスタレ状になっているもの）の上に花筵を敷き、花卉をうすく並べ、さらにその上に花筵を敷き、散水して風通しのよい日陰に一～二日並べる。毎朝冷水をかけるか、朝露がかかるようにする。花卉は次第に赤味を帯びてくる。

⑥ 花ねり 粘り気の出してきた紅花を、臼に入れて杵でつくか、半切桶に入れて踏み、餅状にする。これをちぎって直径二センチほどの団子状にまるめる。

⑦ 花ふみ 花筵に団子を並べ、さらに花筵をかぶせ、その上から素足で平均に踏み、直径三センチほどに平たくのばす。

⑧ 花干し 上の花筵を除き、せんべい状の紅花餅を天日で干す。一日二～三回返す作業をして、しっかり乾燥して仕上げる。この作業は、女、老人、子供たち、ときには急がない旅人が手伝ったという。

暑い時季なので品質が落ちないように手早く処理しなければならないなど、作業期間が短いこともあって、その労働は家族総動員の忙しい状態を呈した。

### 参考文献

早田茂松「紅花入門 紅花は咲いている」遠藤書店発売（昭和五九年）

山形県編「図説山形県史」『山形県史別編・1』山形県（昭和六三年）

「東根市史 通史編上巻」東根市（平成七年）

横山昭男編「図説山形県の歴史」『図説日本の歴史・6』河出書房新社（平成八年）

斎藤吉弘・武田陽「孫太郎日記」武田陽（平成十一年）

斎藤吉弘・武田陽「安政七年・孫太郎日記」武田陽（平成十四年）